

行政視察報告書

令和7年5月19日

柏原市議会

議長 田中 秀昭 様

総務産業委員会

委員長 奥山 渉

総務産業委員会行政視察につきまして、下記のとおり報告いたします。

記

- 1 視 察 日 令和7年4月14日（月）～15日（火）
- 2 視 察 先 山口県周南市、広島県広島市
- 3 視察の目的 1日目【山口県周南市】
徳山駅前賑わい交流施設における中心市街地活性化の取組につ
いて
2日目【広島県広島市】
平成26年広島土砂災害の記憶と教訓の継承、防災教育施設の
在り方について
- 4 視 察 者 総務産業委員会
奥山 渉 委員長 鶴田 将良 副委員長
榊田 和之 委員 江村 淳 委員
山口 由華 委員 新屋 広子 委員
峯 弘之 委員 山下 亜緯子 委員
- 5 視 察 内 容 別紙のとおり

◎令和7年4月14日(月) 山口県周南市

- 視察場所：徳山駅前賑わい交流施設
- 視察案件：徳山駅前賑わい交流施設における中心市街地活性化の取組について

研修内容

山口県周南市に位置する「徳山駅前賑わい交流施設」について視察を行い、中心市街地の活性化施策に関する説明を受けた。周南市は、人口約13万人を擁し、瀬戸内海に面した温暖な気候と、歴史ある産業都市として発展してきた地域である。

市では、人口減少や中心市街地の空洞化といった課題への対応策として、徳山駅前図書館を核とするにぎわい創出と地域活性化を図る取組を展開している。当該図書館は、JR徳山駅の駅ビル「徳山駅前賑わい交流施設」内に整備された複合型施設で、図書館にカフェ（スターバックス）、書店（TSUTAYA）、キッズスペース、市民活動支援スペース等が一体となった「滞在型図書館」として設計されている。

施設の運営は、指定管理者制度を導入することで、民間のノウハウを活用した柔軟かつ効率的な運営がなされており、市としては、財政負担の軽減とサービスの質向上の両立を目指している。

館内のレイアウトは、設計段階から市民参加型ワークショップを実施するなど、利用者ニーズを反映した空間づくりが行われており、飲み物を片手に読書できるラウンジスペースや、子育て世帯向けの遊び場、会議室や学習スペースなどが設けられている。これにより、施設に対する市民の愛着と利用意欲が高まり、結果として多世代が集う賑わいの創出に繋がっている。

徳山駅という市の玄関口に立地している利便性も相まって、通勤・通学者や観光客も含め、多様な層が気軽に立ち寄れる環境が整っており、図書館が地域のにぎわいと交流の拠点として機能している様子が確認できた。都市の課題である中心市街地の空洞化対策や公共施設の複合化・集約化の好事例である当該図書館への視察は、大変学びの多いものであった。

考 察

今回の視察で特に印象的であったのは、「図書館を核としたまちのにぎわい創出」という明確なコンセプトに基づき、市民の滞在・交流を促す空間が戦略的に整備されていた点である。

本を借りるだけの図書館にとどまらず、カフェや書店、子どもの遊び場、市民活動スペースなど、様々な目的を持つ来訪者が自然と交差する空間づくりがなされており、新たなコミュニケーションが生まれる「場」として機能している。特に、スターバックスのようなブランド力のある民間テナントを導入することで利用者層が広がり、静かな読書空間に限らない多様な利用形態が生まれていた。民間のノウハウを活かすことで、デザイン性や利便性の向上、マーケティング力の導入など、得られるメリットは非常に参考となった。

また、施設整備において市民参加のプロセスを重視し、「使われる」「愛される」施設づくりが行われていることは、今後のまちづくりにおいても大きな示唆を得るものである。

柏原市においても、JR 柏原駅・近鉄堅下駅を中心とした柏原東地区には図書館、公民館、商店街、子育て支援施設などが集積しており、周南市と同様の「人が集う複合的な空間」としての可能性を有している。老朽化が進む公共施設の再整備や、財政制約がある中でまちづくりを進める柏原市にとって、今回学んだような民間活力の導入、利用者目線での空間設計、市民の参画を促すプロセスは、極めて有効である。また、単なる建て替えに留まらず、「公共施設の意味」を問い直し、まちの価値を高める投資として位置付けることの重要性も感じるものであった。

今後の柏原市における施設再編やまちづくりにおいて、「にぎわい」「つながり」「多様な居場所づくり」を意識し、周南市の先進事例を柏原市の実情に合わせて積極的に取り入れることで、地域の活性化と住民満足度の向上を図りたい。

◎令和7年4月15日(火) 広島県広島市

- 視察場所：広島市豪雨災害伝承館
- 視察案件：平成26年広島土砂災害の記憶と教訓の継承、防災教育施設の在り方について

研修内容

広島市安佐南区にある「広島市豪雨災害伝承館」を訪問し、防災教育の取組と教訓の継承方法について学んだ。広島市は人口約118万人を擁する政令指定都市であり、視察先の安佐南区は、市北部に位置し、人口約24万人、面積117km²を有する住宅地と山間部が混在する地域である。区の面積の約43%が山間部であり、近年、急速な宅地開発が進んだことにより、市街地のすぐ背後に急傾斜地が広がる土砂災害のリスクが高い地域でもある。

平成26年8月、同区では記録的な集中豪雨により大規模な土砂災害が発生し、77名もの尊い命が失われた。この災害を風化させることなく、次世代に伝えることを目的として、令和5年に開設されたのが同伝承館である。

館内では、災害発生時の状況や被災者の証言、地形模型、報道記録などを通じて、災害の全体像や避難行動の課題が分かりやすく展示されていた。また、映像シアターでは、避難行動の重要性を再認識できる内容が上映されており、来館者に対して「自分ごと」として災害を捉える視点を喚起していた。

同館は単なる記録の場ではなく、命を守るための防災教育の拠点として、地域住民や学校と連携しながら防災講座や避難訓練などを実施している。被災者でもある館長・副館長からは「教訓をどう活かすかが最大の使命である」との説明があり、防災意識の醸成と行動変容を目指す継続的な取組が印象に残った。

柏原市においても、山地と住宅地が近接する地形や、過去の土砂災害の経験など、共通する課題を多く抱えていることから、広島市のように災害を「風化させずに伝える」施設の在り方は、今後の防災施策を検討する上で大いに参考になると感じた。

考 察

本視察を通じ、自然災害の恐ろしさと、その教訓をいかに次世代に伝えていくかという行政の責務の重さを改めて認識した。同館の最大の特徴は、単なる展示や記録の場にとどまらず、「命を守る行動」を促す実践的な防災教育の拠点として機能していることである。特に、「なぜ避難できなかったのか」「なぜ助けられなかったのか」といった切実な問いを軸に構成された展示内容は、防災教育の本質を突いたものであり、強い当事者意識を醸成する点で非常に有効であると感じた。

また、土砂の流れや地形変化を再現した模型や映像、被害者の証言や報道記録など、視覚・聴覚を通じた展示により、子どもから大人まで理解を深められる点は、多世代を対象とした学習方法として非常に効果的である。さらに、同館を拠点とした地域・学校・行政が連携した防災活動が展開されており、「伝える」ことが地域全体の防災力を高める好循環を生み出していることにも感銘を受けた。

柏原市においても、山間部と住宅地が近接しており、過去に土砂災害による被害を経験している。「最終的に命を守るのは個人の判断と行動」であることを踏まえると、ハード面での対策に加え、ソフト面での防災教育の充実が求められる。類似の施設を整備することは難しいかもしれないが、公民館や図書館など既存施設を活用し、災害の教訓を伝える展示やワークショップの開催、災害対応に関わった市職員や住民の経験を記録・継承する仕組みを構築することは、今後の防災力向上に資するものである。広島市では、被災した住民が災害対応を振り返る動画教材を作成・活用しており、職員教育の場にも活かされている。柏原市においても、過去の災害対応や避難の判断基準を記録として体系化することで、将来の行政職員や防災リーダーの育成に繋がると考える。

本視察を通じて得た最大の学びは、「災害は必ず起こる」という前提に立ち、「そのとき命を守れるかどうかは、普段の備えと意識にかかっている」ということである。行政として命を守る責任をどう果たすのか。その答えの一つが広島市豪雨災害伝承館のように教訓を行動に変える場の創出にあると理解することが出来た。柏原市においても、過去を学び、現在を見つめ、未来に備える防災教育の充実を目指して、地域とともに実効性ある取組を一步ずつ進めていきたい。